

## 中国帰国者支援・交流センター「交流事業」に 託された役割をみつめて

平城 真規子

(中国帰国者支援・交流センター)

### 0. はじめに

中国帰国者支援・交流センター(：首都圏センター(以下、「センター」))「交流事業」が正式にスタートしたのは、センター設立後半年を経た2002年7月のことだった。当初の漠然とした事業の枠組みが数年を経て徐々に固まりつつあるが、目標の具体化という点では、まだ道のりの半ばにも達していない感がある。むしろ事業遂行の過程で新たな課題が浮かび上がってきて、目標は少しずつ遠のくようにさえ見える。とはいえようやく5年目の区切りを迎えたいま、過去の歩みを振り返って、その果たしてきた役割を(果たせていない役割も含め)総括するとともに、事業のこれからの行方を展望してみようと思う。

### 1. センターの交流事業がめざしたこと

#### 1-1. 目標設定

センター開設時、「交流事業」に私たちは何を託そうとしたのだろうか。厚生労働省の中国帰国者支援に関する検討会報告書(2000年12月4日付：注1)には、帰国者の高齢化や2、3世の多様化を踏まえ新たな支援の方向性が示されている。とりわけ1世については「高齢化の進行に伴い、地域社会での孤立化が懸念され、かつての指針であった経済的自立にかかわって、地域での交流を保ちながら社会の一員として生活するという意味での社会的ないし精神的自立を図ることを主として支援することを、今後の施策の基本とするべきである。」とある。

ここでいう「社会的自立」とは、地域社会の中で自ら周りの人と良好な人間関係をつくっていけるということであり、「精神的自立」とは、「自

律」つまり「自己決定できる」ことを意味している。自分がこれからどうしていききたいか、どのような生活をしていききたいかなどを自らが決定するということである。それはまた「周囲の人の良好な関係を築きながら自分自身で意志決定を行い 生き甲斐や張り合いをもって主体的に生きる姿」だといえる。多くの帰国者のように、例え支援者の援助を必要としても、少なくとも自由に意志決定し、主体的に生きている状態であれば自立しているといえる。

人間は相互依存によって自分の自立が維持されているという。したがって他人との好ましい人間関係の維持や相互作用の確立が自立のための大切な条件となる。つまり、人間関係の根底としての「他者とのつながり」が保たれていなければならない。帰国者は異文化環境下でどのようにしてこの他者とのつながりを見出していくことができるのだろうか。とりわけ中年以降に帰国した孤児やその配偶者の世代では、言葉や文化の障壁から社会参加の機会が限られていたこともあり、家族や公的支援者等ごく一部の人々との人間関係の中で長年暮らしてきた人が少なくない。彼等は、地域社会の一般日本人は勿論、帰国者同士のつながりも十分築けないまま老後を迎えている。また、言葉の問題は、よりよい生活のために有益な情報の獲得やその活用、例えば一般の日本人の誰もが享受できるはずの地域福祉サービスの利用等も難しくさせ、地域社会から疎外されたまま今日に至っている。他者とのつながり、地域社会とのつながりという二重の意味で、“つながり感”の喪失は危機的といえる。

このような状況認識の下、センターの「交流事業」では、帰国者が、帰国者同士あるいは支援者とともにコミュニケーションを通じて意志や感情を伝えあう喜びを共有しながら「つながり」を広げ、あるいは深め、さらに日々の暮らしに張り合いや生きがいを見出していけるような交流の場、学習の場づくりを直接的あるいは間接的に実現することを目指した。この目標は帰国者1世代に限らず2世代に対しても共通することではあるが、支援の緊急性という点でまず1世代を念頭に取組んだ。

## 1-2. 支援の枠組み

上記の目標を達成するため、次のように3つの枠組みに基づき具体的な方策を模索することとした。

<b>【1】センター主催による交流活動の実施：直接 帰国者を支援する</b>
主にセンターのサロン教室を使って文化活動や交流活動を実施するとともに、いわば“アンテナショップ”として、帰国者が気軽に参加できる活動の種類を増やし実施のノウハウを蓄える。ここでの取り組みは、センターホームページ(注2)や中国残留孤児援護基金報を通じて全国の支援者に紹介し、各地の交流活動普及に役立てる。
<b>【2】地域のボランティア育成／ボランティアネットワーク構築 のための研修会の開催：不特定多数の支援者を支援する</b>
次のような目的の下、都道府県単位でボランティア研修会「まなびや」を開催する。 ①支援者へ研修機会を提供するとともに、これを地域における支援者間の情報交換や協力関係の強化につなげる。 ②帰国者問題の普及啓発に役立てるとともに、新たなボランティア支援者の掘り起こしを行う。 ③センターと地域支援者とのネットワーク構築に役立てる。
<b>【3】地域に根ざした交流活動への支援：帰国者／支援者 個人または団体／グループ の交流活動を 支援する</b>
首都圏を中心に、帰国者自身や支援者が地域で取り組む様々な交流活動に対して、以下のような側面支援を行う。 ①交流の場づくりへの協力 ②支援グループ立ち上げへの協力 ③支援活動拡大への協力

## 2. 「センター主催による交流活動」の推移(1-2. 支援の枠組みの【1】)

### 2-1. 最初の壁

先に述べた交流事業の目的、すなわち帰国者が他者とのつながりを見出し、日常生活を自律的に生きられるよう支援するという目的のためには、単発のイベント的な活動機会を提供するよりは、むしろ継続性があり、共通の興味関心を土台に人間関係を構築できるような場、さらには自己啓発にもつながる場をめざしたいと考え、比較的帰国者ニーズの高い内容を講座として支援メニュー化することとした。

まず、“アンテナショップ”としてセンターのサロンスペースを活用してさまざまな活動を試行することとしたが、最初にぶつかった壁はセンターの位置にあった。センターは東京台東区の中心街に程近い場所に設けられた。千葉、埼玉、神奈川といった広域の帰国者を支援対象とすることから交通アクセスに配慮したものだ。しかし、片道1時間～1時間半の距離を一定の頻度で交流活動のために通うという体験はおそらくほとんどの帰国者にとって初めてのことであったろう。

ここで中国の老後のライフスタイルを想起してみる。中国の都市部ではよく知られているように、公園という公共空間で多くのグループ・個人が太極拳、気功、ダンス等健康増進活動をはじめ、シャンチー(中国将棋)、京劇などの余暇活動に自主的に取り組む姿が見られる。グループ活動では講師役のリーダーや先輩格の参加者から無料で教わることができ、老後は毎日のように徒歩や自転車で通う人も多い。このように日常生活空間の中でお金を極力使わず自主的に健康増進や余暇活動を楽しむというスタイルが中国都市部の伝統的な暮らしの一端とするなら、そのような中国的価値観の中で生まれ育った帰国者が、活動に参加するために交通機関を利用して(一定の経費負担を覚悟して)まで行動範囲を広げるといったことは簡単に受け入れられないのではないかと懸念した。この点で、日本語教室に通う場合のように、生活課題の解決という目的を帰国者自身が強く自覚し、日本社会適応へのパスポートとして周囲からも支持される学習行動とは異なっていた。まして中国の農村出身者の場

合、老後の生活スタイルはより簡素なもので、都市部のように公園空間を活用する余暇活動等にも馴染みがない。センターが提供するメニューは何となく楽しそうだと想像できても、自分の日常の行動範囲を越えて費用と時間を割いてまで参加するだけの踏ん切りがつかないのではないかと思われた。交流活動から何が得られるのか、体験してみないと費用対効果が見えないのである。最初にスタートした絵手紙、書道講座、ゲートボールなど、どの講座も立ち上げ後しばらくは参加者数も少なく、出席率に一喜一憂する日々が続いた。

## 2-2. 健康への不安、中国文化への回帰に着目

そんな時、罹患率や通院率も高く健康不安を抱える帰国者が多い点、また、先行事例としての在日コリアン1世「ハルモニ（お婆さん）」の交流活動やこれを支援する組織の取り組み（注3）から得られた「一般的に異文化環境下にある高齢者は年を重ねる毎に母文化を懐かしむ傾向が強まる」との知見、「他者とのつながり」という場合、先ず帰国者同士のつながりを優先し、母文化が肯定され、安心感ややすらぎを覚える環境を提供すべきである点などに思い至った。これらを踏まえ太極拳、気功などの中国伝統文化の特技をもつ中国帰国者を講師（活動リーダー）として積極的に活用し、活動の中身や進め方をリーダーと相談しながら決めていったところ、“ロコミ”も手伝って次第に参加希望者が増え、長期継続型として安定するようになった。他にも多様なニーズに配慮した単発や短期の講座・交流会を随時試行しながら、2005年度からは、行動力や気が落ち込み閉じこもり傾向が長く続いていて、それ故に支援の必要度が高いと思われる帰国者を念頭に、中国映画鑑賞会を開催してきた。現在まで多少内容の入れ替えはあったものの、全体として長期継続型講座・交流の数は増え、参加希望者も増加傾向にある。（表1、図1参照）

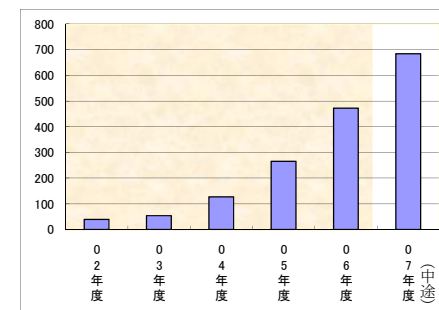
さらに、2007年度より施行された地域支援プログラム（注4）による交通費支給もプラスとなって増加傾向が強まっている。

表1 長期継続型 講座・交流会の推移

2002年度	ゲートボール交流			書道	絵手紙	象棋交流											
2003年度	ゲートボール交流	和裁	異文化交流	書道		象棋交流											
2004年度	ゲートボール交流	和裁	異文化交流	書道		象棋交流	気功				24式太極拳						
2005年度			異文化交流	書道	絵手紙	象棋交流	気功	社交ダンス	中国映画	24式太極拳							
2006年度			異文化交流	書道	絵手紙	象棋交流	気功	社交ダンス	中国映画	24式太極拳	48式太極拳						
2007年度			異文化交流	書道	絵手紙	象棋交流	気功	社交ダンス	中国映画	24式太極拳	48式太極拳	太極扇	合唱	手芸交流			

※上記のうち「交流」型は一般日本人をゲストとして受け入れている。

図1 「長期継続型 講座・交流会」申込者数の推移（上期下期延べ人数総計）



### 2-3. 効果についての参加者評価

上記の長期継続型講座について、継続的な参加の結果、帰国者の心理や生活状況に変化が起こったか否かを知るため、参加者に対して質問紙記入方式による意識調査を行った（資料1参照）。但し、質問紙回答が困難あるいは不慣れた帰国者の存在や、質問紙に表れにくい諸事情など、帰国者に対する質問紙調査には限界もある。筆者は日常的に活動の前後や休憩時間など可能な範囲で帰国者に接し、その言動を観察したり、普段のやりとりの中で帰国者から自発的に語られる言葉を拾うようにしており、そこで得た情報も調査結果の考察の際に資料として加えた。

#### 〈調査の概要〉

##### 1) 主たる調査目的

交流活動の効果について参加者の自己評価を知り、今後の交流活動の改善に役立てる。

##### 2) 調査対象

2007年6月現在、長期継続型の講座や文化活動のうち、太極拳、社交ダンス、書道、中国映画に通う138名（実人数。調査時期、気功は講師側の事情で休講中、臨時講師によって内容が変更されているため対象外とした。また目下の絵手紙講座は日本文化を母文化とする残留婦人が主たる参加者のため同じく対象外とした。）

##### 3) 調査方法…質問紙記入方式

##### 4) 主な調査項目

a. 参加動機、b. 満足度、c. (自己評価としての) 効果

なお、「c. 効果」については、孤立化傾向が改善されたか否かを判断する基準として、① 空間的側面（外出頻度や生活行動範囲）

② 対人関係面（交際意欲、交際状況） ③ 心理面（孤立感）の3つの側面に着目して、参加する以前との比較を求めた。また張り合いや生きがいに結びつく肯定的な心理状態および健康状態に関する設問も立てた。

#### 〈調査結果〉

有効回収率 61% (84件)

図2 交流活動に参加した動機

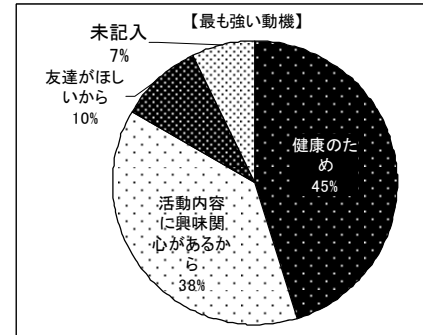
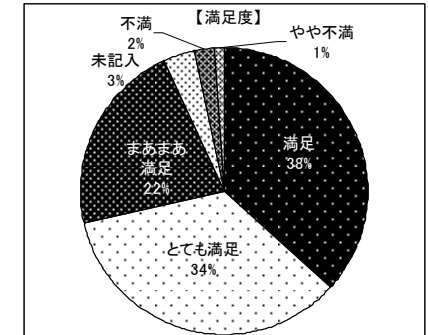


図3 満足度



なお、不満な理由として「回数が少ない」が挙げられ、他に「経験者と初心者がいっしょに練習するので、初心者には難しすぎる（社交ダンス）」、「復習が多くて新しいことになかなか進まない（社交ダンス）」がある。

図4 孤立感の変化

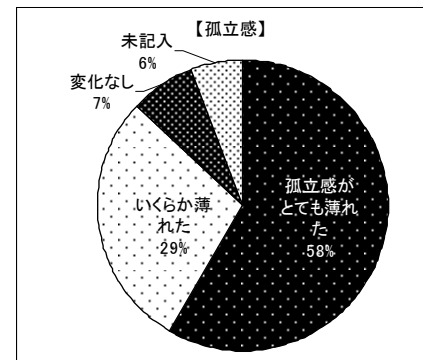


図5 外出機会の変化

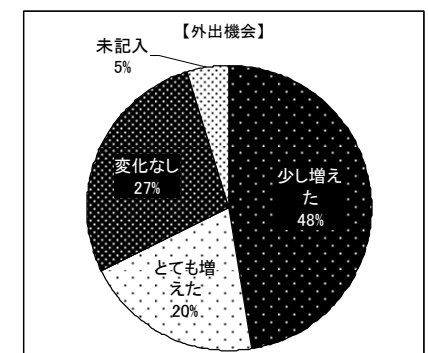


図6 対人交際への欲求

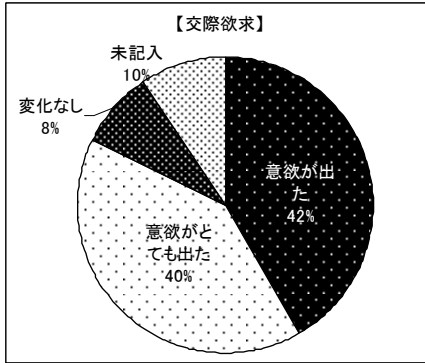


図7 交際機会の変化

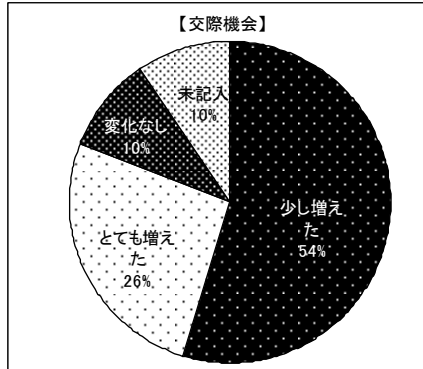


図8 身体的変化

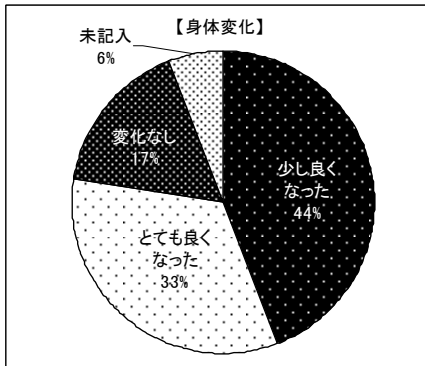


図9 生きがい感

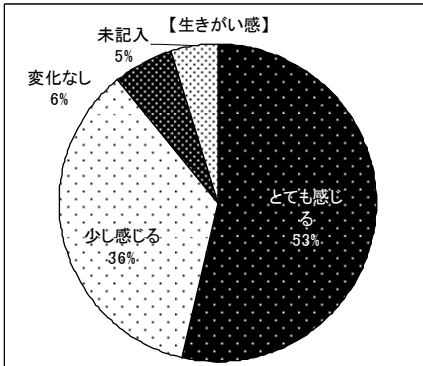
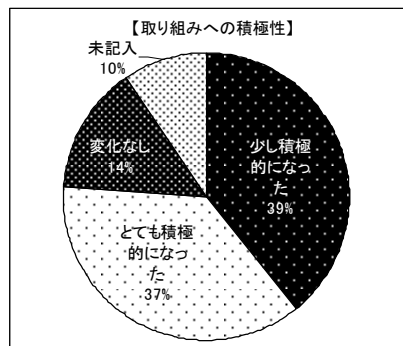


図10 物事に取り組む積極性



次に、自由記述欄から代表的な意見を紹介する。(原文は中国語)

[太極拳]

- ・太極拳は集団活動で、みんなで一緒に練習していると、知らない者同士が知り合い、お互いに行き来して友達になる。気持ちがすらすらと伝わり、食欲は増す。生活にリズムができて精神的にも愉快だ。
- ・孤独感が薄れた。太極拳を始めて病気への抵抗力も付いて、病院に行く回数が減った。
- ・太極拳に参加してまだ1ヶ月位だが、みんなで話したり笑ったり、お互いに相手を気遣って、健康上も気持ちの上でもよい効果があった。
- ・太極拳をやって血圧が下がった。以前は 168/98、今は 138/68。太極拳をしないと血圧が上がる。
- ・認知症の予防になる。4年前長男が精神的ストレスで自殺した後、落ち込んで外出せずじっとしていた。全身が痛くて、そのまま呆れるかと思った。太極拳をやりはじめてよくなった。毎日でも外に出たい。
- ・身体は以前よりずっと強健になったと思う。精神面もよくなった。食欲が増加し、血圧が下がった。だからずっと続けて健康を維持したい。

[社交ダンス]

- ・毎週練習日は情緒が比較的安定し、元気になる。
- ・現在 84 才一人暮らし、視力障害（障害2級認定）があり活発な動きはできない。家に1人でいてもよいことは考えない。ダンスはできないが、みんなの練習風景を眺めたり、少しおしゃべりしたりできるだけ嬉しい。(口述筆記)
- ・社交ダンスはみんなの沈んだ気持ちを活発にさせる。身体を動かし、老年に入った帰国者に良い活動機会を与えてくれる。
- ・気持ちが上向きになり楽しいし、身体にもいい。
- ・生活が多様化し、リズムができた。
- ・少し変化を感じるようになった。身体にもいくらか変化を感じる。よい方向で変化している。

- ・人は老いても気分が良ければ、できる範囲で残されたエネルギーを発揮する機会がほしいのだと思う。
- ・（日本人講師と）友達になる。日中間の相互理解を育み、日本社会に対して更に新しい気持ちを持つことができる。

#### [書道]

- ・家にいると寂しくて、気が滅入る。書道を学べるだけでなく、友達ができるからいい。
- ・家にいるととても寂しい。日本語は学んでも覚えられない。聞き取り力もまだない。気分がとても悪い。書道の知識も学べるし、友達も出来る、嬉しいことだ。
- ・言葉が通じないから、筆を持てばとても長い時間を過ごせる。
- ・書道は頭と手を使うので、認知症を予防できる。
- ・書道を通じて漢字が上手に書けるようになった。先生が基本から一生懸命教えてくれて、みんなも頑張って練習する。休み時間にはお互いにおしゃべりする。センター関係者も気を配ってくれる。
- ・ここは本当にいい所だと思う。単調な日常生活を豊かにしてくれて、寂しさや憂鬱な気持ちを軽減してくれる。まだ参加したことのない人はみんなここに来て楽しめばいいのと思う。

#### [中国映画鑑賞会]

- ・意気投合できる友人に巡り会いたい。お互いに理解し合える友達がほしい。
- ・毎月センターで中国映画を見られる日を心待ちにしている。回数を増やしてもらえるといい。以前は娯楽の場もなくて寂しかった。
- ・映画は中国語だからわかる。センターは日本で唯一私たち帰国者や家族が中国映画を見られる場だ。
- ・センターがこのような機会を与えてくれて満足している。毎回交流して沢山の友達ができるし、楽しい気持ちになれる。帰国者が集まって

友達になれる機会をもっと企画してほしい。

- ・小さい頃から中国で育ち、長年中国文化の教育を受けてきたので、中国の風土や人情が好きだ。中国映画を見ると聞き取れるし、見てよくわかる。（中略）映画を見るのは文化的生活を享受することだと思う。
- ・帰国者は言葉が通じないし、他人と交流できない。寂しくて堪えられない。重い病気がある者にとっては非常な苦しみだ。とりわけ雨の日は気持ちがとても落ち込んで自殺したくなった。みんなと交流できる機会ができてから精神的に一変した。自殺の考えは消えて百まで長生きしたいと思うようになった。
- ・映画を見ると勉強になるし、沢山の仲間と接触もできる。孤独感がなくなって、生活が楽しくなった。
- ・友達ができて孤独感が少しずつ薄れた。時間があれば友達に電話しておしゃべりし、様子を聞きたい。自分でも気分がいいし、生活にリズムができた。話すことが好きになり、友達付き合いもしたくなった。
- ・帰国して10年経つが、どこにも楽しく気を休められる場所はない。いや場所がないのではなくて私が日本語がわからないから日本映画を楽しめないし、楽しい場所にも行けないのだ。毎日ぼけーとしていて。中国映画は聞き取れるし、感情を込めて映画の喜怒哀楽を味わう。精神的緊張感が解け、ストレスが軽減され、楽しい気分になる。
- ・映画鑑賞の機会（待ち時間にゲームやおしゃべりを楽しんでいる）を通じて友達になれる。お互いに気持ちを語り合い、苦悶を消す。
- ・学習機会や交流機会があつて、精神の糧が増える。普段の暮らしに希望が湧き、よりよく生きられるという自信が強まる。

#### <考察>

##### 1) 行動面や交際状況について

外出機会については68%が増えたと答え、交際機会についても80%が増えたと回答した。今回具体的事項について質問できなかったが、特筆すべきは、帰国者によるセルフヘルプグループ（注5）の誕生である。



太極拳講座ではセンター内の週1回の活動に満足せず、帰国者自らサークルを複数誕生させた。講師を務める帰国者が住居近くの都内公園で立ち上げたサークルと講座生の帰国者数名が発起人となって同じく公園で立ち上げたサークルである。いずれもセンターを起点にした帰国者ネットワークが機能した形だ。前者は都内の他、埼玉県や遠く山梨県から参加する者がいるという。後者の講座生によるサークルでは地元住民も途中参加しており、今後の展開が楽しみである。その他センターの講座で太極拳を学んだ自信からか、地域の公園で一般住民が集う太極拳練習に参加するようになった例もある。数年来、朝の散歩コースで見かけていた一団に「私、家内、太極拳 いっしょ 大丈夫？」という発話で、仲間入りを果たしたとのことであった。帰国者中心のコミュニティから脱却し、自力で地域社会へのデビューを果たした点から高く評価できると思う。

## 2) 孤立状態の改善について

87%が孤立感が薄れたと回答している。特に心理的側面の具体的変化については自由記述の中に垣間見ることができる。参加動機に関する回答では、健康面や活動内容への関心が大きな位置を占めており、「友達がほしい」という回答は少数であった。一見したところでは孤独感が浮き彫りにはなっていなかったが、対象者の多くは来日後十～十数年を経過し、長年孤独な環境を当然のこととして受容せざるをえなかったこともあり、参加動機として意識の前面に浮かび上がらなかったのかもしれない。孤独感はむしろ身体的な不調感に転化されてきた面があるのではないだろうか。なお、対象者の中には「すでに以前から日本語クラスに通う等」比較的行動力が高く「閉じこもり度」が低いと思われる人も多く含まれており、その場合概ね自己の変化についての評価は低い。今後は明らかに孤立感が強いと思われる人を対象に、ケーススタディとして経過観察していく調査が必要と思われる。実際ここ2、3年は帰国者間の口コミで知ったり、実際に友人の帰国者に連れてこられたりした人の中で、うつ傾向を訴えるケースがある。

## 3) 心身の健康について

帰国者1世代は一般の日本人と比較して罹患率や通院率が高いことは従来より指摘されてきた。中国東北地方(注6)の厳しい自然環境の中での半生に加え、帰国後の異文化環境から受ける精神的ストレスの影響、さらに高齢という要因が重なっている。参加動機として45%が健康のためと回答したように、帰国者自身も病状改善や健康増進への関心が高い。身体活動が中心の講座では具体的な改善状況を報告している声が多くある。また「家族から『お母さん、今みたいに家にじっとしていたらボケるから、こういうのに出なさい』と言われた。」と認知症予防的な効果を意識して通う例も見られる。

講座参加後の身体的変化については77%がプラス評価している。さらに自由記述に表れたように気持ちの変化が大きい。WHO(世界保健機構)は「身体だけではなく精神的にも、社会的にも健康な人こそ真に健康な人」と定義づけている。人は社会的な生き物であり、精神活動も社会との交流、他者とのコミュニケーションを通して調整できる。そこで講座活動を通じて行われる帰国者間の社交は大きな意味を持ってくる。参与観察を行っている、三々五々集まってきた人々が気の合う仲間を見かけては互いの様子を尋ね合ったり、世間話を始めたりする。時には真剣に話し込む姿もある。無口な人は無口なままだが、マイペースでいることが許容される空気がある。どの人も押し並べて表情は穏やかで明るい。筆者もその場に居合わせれば一参加者のように待遇され、体調を気遣ってくれる人もいる。不調だといえば、自身の体験からのアドバイスや薬の情報を提供してくれる。相手に関心を持ち、できる援助があれば互いに与えあい、つながりを深めていく。中国社会で馴染んだ互助的な付き合い方にも通じる。

またこの環境はピアカウンセリングが行われるのに相応しい環境だ。ピアカウンセリングとは「同じような環境や立場にいる、同じような経験や状況、感情を共有する仲間同士が日常生活の中での情報、相談ごとなどを気楽に、そして心を開き素直な気持ちで話し合うこと、お互いに

カウンセラーになって自分の考えを打ち明けること」であるという。他人を理解するための条件の一つが「類似性」にあるとすれば、帰国者として同じような経験をもつ者同士が中国語という共通の言語を用いて、相互援助のコミュニケーションを行いつつ、互いに依存した互助関係を築くことが望ましい。私たち支援者は、ピアカウンセリングが行われるに相応しい受容的な温かい雰囲気づくりに努め、帰国者同士が支え合う「つながりの場」を広げていければと思う。

#### 4) 異文化の中での生きがい

生きがいを感じると答えたのは89%に及ぶ。精神的ストレスや孤独感の解消に留まらず、生きがいや張り合いを感じる比率が高い背景には、帰国者コミュニティの中で、仲間や周囲との相互作用を繰り返しながら、物事に取り組むことによって、自分自身を取り戻し、積極的に生きようとする姿勢が養われていくからだと思う。先に紹介した太極拳の自主グループの誕生や地域コミュニティへの参加はその表れである。単に特技の習得やレベルアップのみに生きがいを感じるのではなく、その根底で生きがい感を支えるのは、集団への帰属感、つながり感であるように思う。

### 3. 「地域のボランティア育成／ボランティアネットワーク構築 ための研修会『まなびや』の開催」(1-2. 支援の枠組みの【2】)

当センターの設立時点では、中国帰国者支援・交流センターは首都圏にある当センターと近畿センターの2か所のみであった。そのため交流事業としても全国の帰国者や支援者を念頭に事業を進める役割を担っていた。その具体的方策として発想されたのが支援者向け支援策としての「ボランティア研修会『まなびや』」であった。これは当センターが都道府県単位で開催するもので、地域のボランティアに研修機会を提供し、以て地域の支援事業活性化を図ろうとするものであった。(2005年度から2007年度にかけ支援・交流センターが増設され、現在は、全国をいくつかのブロックに分け各ブロックに支援・交流センターが設けられてい

る。そのため、ボランティア研修会もブロック毎に担うことが可能になってきている。)

本研修会は「資料2. 首都圏センター『まなびや』開催記録」の通り、当センターとして5年間15地区で実施した。参加者からの評価については当センターホームページで報告済みであるが、概ね好評であった。テーマや内容は基本的に地域との協議の下に決定したため、研修ニーズを探る過程で、自ずと地域の支援状況や帰国者状況が把握できたこと、また、当センターとして各地の支援者とのネットワークを構築できたことは、その後の交流事業を展開する上でプラスとなった。

### 4. 「地域に根ざした交流活動への支援」(1-2. 支援の枠組みの【3】)

数年を経て、全国から首都圏ブロックへと支援範囲は推移したが、いずれにしろ当センターとして地域における帰国者支援活動に対し、「ボランティア研修会」とは異なる視点から、何らかの具体的な側面支援ができないかと考えた。施策上も予算的にも明確な裏付けのない段階ではあったが、先に示したセンター「交流事業」の目的を、センター主催による直接支援という形ではなく間接的に各地で実現する上で、避けては通れない課題と思われた。

そこで次の段取りで進めた。

- (1)センターとして可能な地域支援の枠組みを想定する。(83頁 支援の枠組【3】「地域に根ざした交流活動への支援」参照)
- (2)その枠組みを参考に、地域を対象とした支援事例(試行)を積み重ねる。
- (3)試行で用いた支援方法と内容を整理しつつ、必要なら枠組み自体の修正を図る。
- (4)支援の過程で生み出されたリソース、将来的に必要と思われるリソースも整理する。

上記の手順に従い、支援者向け、帰国者向けに分けて整理した側面支援の枠組みと内容は以下の通りである。(具体的事例は当センターホー



ムページ上の報告参照)

[支援者向け]

①交流の場づくりへの協力	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・交流会(帰国者同士、あるいは帰国者と市民の)の企画援助</li> <li>・地域の帰国者への交流会案内の作成・送付</li> <li>・交流会当日の運営補助</li> </ul>
②支援グループ立ち上げへの協力	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・支援者向け説明会/講座等 への担当者派遣</li> </ul>
③支援活動充実化(拡大)への協力	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・帰国者支援団体/グループ がその地域において行う普及啓発活動への援助(国際交流関係の催しの際の展示コーナーへの帰国者関連資料の貸与等)</li> <li>・帰国者支援団体/グループ への活動案提供、活動事例収集と提供</li> <li>・ボランティア団体/グループ 主催の交流会に新たな参加者として帰国者を招き入れるための援助(通知や連絡等)</li> <li>・帰国者問題関連の取材を企画している報道関係者に対する、帰国者支援団体/グループ の活動、あるいは帰国者自身による自主活動についての情報の提供(帰国者の自主活動グループの場合は、取材協力の依頼や取材の段取り等についての連絡・相談の代行)</li> </ul>
④地域実態調査への協力	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・帰国者向け交流ニーズ調査(電話によるインタビュー等)</li> <li>・帰国者支援状況の調査(インターネットの利用や電話によるインタビュー等を用いて)</li> </ul>

[帰国者向け]※

①交流の場探しへの協力	
	<p>例) 地域で孤立し、交流の場を求める帰国者の求めに応じて、帰国者の希望する地域内での中国系住民の交流の場について、情報を収</p>

	<p>集・提供(インターネットの利用や電話によるインタビュー等を用いて)</p> <p>例) 和裁、書道、太極拳等を地域で学びたいという帰国者の求めに応じて、アクセス可能な地域内でのサークルや催し等について、情報を収集・代表者や主催者への協力の依頼</p>
② 交流の場づくり/グループ立ち上げへの協力	
	<p>例) 太極拳を帰国者仲間に教えたいという帰国者からの要望に応じて、センター主催で、講師となる帰国者の住む地区の公共施設を使って体験講座を開催。(紆余曲折を経て)約1年後に自主グループが誕生した際、会場探しに協力</p>
③ 交流活動拡大への協力	
	<p>例) 芸能発表の機会を求める帰国者グループの求めに応じて、帰国者関連の発表会を紹介、地域の祭りへの推薦や参加の依頼</p> <p>例) ボランティア活動への参加希望に応じて、福祉ボランティアネットワークの情報収集・協力の依頼</p>

※ [帰国者向け] の交流活動支援については、センターとしての支援内容を帰国者に周知したわけではないため、件数としては限られる。通常の生活相談として受理したもの他、センター通所生とのネットワークの延長線上で依頼されたものである。

上記、[帰国者向け] の支援①の「交流の場探しへの協力」では、せっかく主催者から協力の約束を得ても、土壇場になって通訳を予定していた家族が降りてしまったり、直前で帰国者本人が勇気を失ったりして行動に結びつかないケースが多かったことが反省点である。帰国者を直接的に支援することのできる地元支援者と当センターの間に協力関係が築けていれば、成功事例が増えたであろうと考えている。

〈高齢帰国者向け日本語教室事業〉

2004年度より新たに「高齢帰国者向け日本語教室事業」が「地域に根

ざした交流活動への支援（「支援者向け」）」に加わった。本事業は地域のボランティア団体に委託して、全国の高齢帰国者（注7）を対象とした日本語教室（サロン）を開催するものである。

まず「日本語教室」という名称でありながら、何故「交流事業」の枠組みの下に進めてきたかについて述べる。本事業のいう「日本語教室」では、高齢帰国者を対象に日本語のレベルアップを目指す場ではないということ、最初の前提とした。何故なら

(1)最大の目的は孤立化の防止、いいかえれば「つながりの場」づくりが重要であること

佐藤他（1997）（注8）で指摘されたように、「非達成ニーズ」、すなわち帰国者同士や支援者との交流や情報交換を求める「親和的ニーズ」を満たすことのできる場づくりが重要であること

(2)上記(1)の目的に照らせば、学習適性、日本語力など多様な背景を持つ高齢帰国者が、こうした差違を乗り越えて、ともに学び活動できる場でなければならないこと

(3)「コミュニケーション支援」の側面からも、高齢者に対しては、記号操作能力としての日本語力を高める訓練より、むしろ支援者等との交流活動を繰り返す中で、コミュニケーションへの積極性や工夫を引き出すほうが日常生活での有用性が高いと見込まれること。

以上の理由による。

上記(3)については、現段階では支援現場での観察や帰国者からの感想を参考に導き出した推論であり、今後実践を重ねて検証する必要があることはいうまでもない。

しかしながら、言語的に困難のある帰国者にとって、周囲の人とのコミュニケーションは相互の歩み寄り、助け合い、あるいは帰国者仲間からの援助によって成立するものであるから、本事業においても、日本語、中国語に加え、筆談、手振り身振りを含めた様々な手段を用いながら、コミュニケーションが活発に行われる活動や環境を作り出していけるとよい。本事業の受託団体の中にも、地域住民と高齢帰国者の協働活動としてユニークな取り組みを行い注目されている地域もある。（注9）

2007年9月現在「高齢帰国者向け日本語教室」は全国20団体によって実施され（他に7団体が準備中）、いずれも地域性や団体の理念、運営条件等を生かした多彩な活動を展開しており（当センターホームページ参照）、言語的困難からスムーズに地域社会に参加することの難しい高齢帰国者にとって、安全で安心できる地域コミュニティ（注10）として機能していると思う。

なお、当センターは実施団体に対して事業の理念についての共通理解を得るとともに、企画時の参考に供するため『交流・学習活動企画の手引』を作成し配布している。また各地の支援現場の状況を当センターホームページを通じて全国の支援者や帰国者に情報提供している。（注11）2006年度には受託団体向けの研修会を開催し、活動状況の情報交換を通して地域間交流を行う等一定の役割を果たせたと思う。

事業名から依然として狭義の「日本語教室」と誤解する向きもあり、本来であれば、その趣旨に即した事業名として「高齢帰国者向け交流教室事業」といった名称が望ましいと考えている。

## 7. 最後に

当センターとしては、今後も「つながり」を求める首都圏在住帰国者に多様な交流の場を提供するとともに、対象地域の帰国者や支援者を念頭に、どのような側面支援ができるのかを模索していくことになるだろう。

前者の役割についていえば、首都圏のような大きな帰国者母集団を擁する地域では、多様なニーズに配慮した講座や交流メニューを効率的に設けることができるのが利点である。その実践の中から、他地域でも活用可能なコンテンツを整理・蓄積することに努めたい。

また、今後首都圏において地域交流活動に取り組む際には、2、3世が直面する地域社会への適応上の問題、とりわけ帰国後の予備的集中教育（定着促進センターや自立研修センターにおける研修）を経験しなかった呼び寄せ家族の問題に配慮し、彼らを巻き込んだ地域交流の試行にも取

り組んでいきたいと考える。

そして、地域内および地域を超えて様々な連携・協力関係を引き出す役割を引き続き担っていきたいと思う。

#### 【注】

注1) 「中国帰国者支援に関する検討会報告書」(2000年)

厚生労働省ホームページ

[http://www1.mhlw.go.jp/shingi/s0012/s1204-1\\_16.html](http://www1.mhlw.go.jp/shingi/s0012/s1204-1_16.html)

／『中国帰国者定着促進センター 紀要 第9号』 p.155～

注2) 中国帰国者支援・交流センター ホームページ：「交流事業」

<http://www.sien-center.or.jp>

注3) 神奈川県川崎市にある「トラジの会」は在日コリアンのハルモニ

(お婆さん)が自主活動を行う会。当初は識字学級から出発したが、勉強だけで帰るのは寂しいとの声に韓国の歌や民族舞踊を楽しむ交流の場として誕生した。民族が育んできた文化を享有しながら支えあっている。「トラジの会」に場を提供し、活動をサポートする「ふれあい館」の存在も大きい。

注4) 地域支援プログラムは、2007年度から施行されている国の施策で、国費帰国で且つ生活保護受給者に対して、一定額の交通費や教材費を国が負担する制度である。

注5) セルフヘルプグループは、さまざまに定義されるが、ここでは「共通の障害や生きていく上での問題を抱えた人同士が自らすすんで自分の気持ちや体験、情報などをわかちあうために集まった相互扶助的グループ」とする。

注6) 帰国者は中国の東北3省出身者が圧倒的に多い。中国帰国者定着促進センター修了生の出身地については本紀要177ページ参照。

注7) 本事業でいう高齢帰国者とは「65才以上」という一般的な定義を準用せず、55～65才の高齢期準備世代を含めて「概ね55才以上」と定義する。言語習得の困難さや、地域社会や日本人との関係の

希薄さという点で共通しているからである。

注8) 『『再研修』および『再研修』カリキュラム設計についての考え方—成人教育の特性をふまえた長期的学習支援の可能性—』p.14  
『中国帰国者定着促進センター 紀要 第5号』(1997年)

注9) 長野県松本市のNPO法人「ナルク・信州まつもとだいら」は「陽だまり教室」という名称で、地域社会で共に生きる立場からIターンした人を含む地域住民と高齢帰国者が野菜やお米づくりといった協働作業に取り組む他、里山ウォーキング、文化活動等を通じて互いにコミュニケーションを深めている。

注10) ここでいうコミュニティとは、地理的に近いというだけでなく、活動理念や感情、興味等を共有している人々のグループとしてのコミュニティを指す。

注11) 既存のテキストを使えば、そのままプログラムの大枠が決定する狭義の日本語学習と異なり、交流活動やさまざまな学習を組み合わせる“サロン”(継続的な支援の場)を運営していく場合、主催者にとってプログラム作りは時に困難な課題となる。『手引き』、センターホームページは、誰でもが企画の参考にできる形で、活動メニューや活動プラン、素材等のコンテンツを蓄積していくことを目指して作成しているものである。

資料1. 【 】講座アンケート ※原文は中国語／無記名

いつもご協力ありがとうございます。今後の企画上の参考にするためにみなさんの感想をお聞かせください。

- [ ] 講座に参加した理由はどれですか。  
(一番大きな理由に◎、その他の理由に○)
- ① [ ] が好きで興味があったから  
②健康のことが気になっていたから  
③帰国者同士友達になれる機会が欲しかったから  
④その他 (具体的に → )
- 講座に参加してどのくらいになりますか。(一つに○)  
半年未満／半年以上～1年未満／1年以上～2年未満／2年以上～3年未満／3年以上
- この講座に参加してどうですか (一つに○)
- |         |    |      |      |    |
|---------|----|------|------|----|
| 5       | 4  | 3    | 2    | 1  |
| 非常に満足した | 満足 | まあまあ | やや不満 | 不満 |
- (差しつかえなければ) 上記回答の理由を書いてください。
- この講座に参加する前に比べて 何か変化はありましたか。  
(それぞれ一つだけに○)
- ①気持ちが明るくなったか (孤独感が薄れたか) ?  
・とても                      ・いづらか                      ・変わらない
- ②体調が良くなったか?  
・とても                      ・いづらか                      ・かわらない
- ③ (この講座に来る以外にも) 外出機会が増えたか?  
・とても                      ・いづらか                      ・かわらない
- ④人との付き合いに積極的な気持ちになったか?  
・とても                      ・いづらか                      ・かわらない
- ⑤人と付き合う機会 (会ったり、電話したり) が実際に増えたか?  
・とても                      ・いづらか                      ・かわらない
- ⑥何かしようという積極的な気持ちが強まったか?  
・とても                      ・いづらか                      ・かわらない
- ⑦生きがいや張り合いができたか?  
・とても                      ・いづらか                      ・かわらない
- 具体的に感じる変化 (気持ちの面、身体の面、生活の面など) があればお書きください。
- その他、この講座について要望や意見があればお書きください。

## 資料2. 首都圏センター「まなびや」開催記録(2002～2006年度)

講演・分科会等の大枠については、県帰国者担当窓口やご協力いただいた支援者(キーパーソン)のご意見・ご要望を参考に企画しました。

No.開催県 日付曜日 会場 参加人数	講演
	分科会(事例報告と協議)
1.北海道 02/10/11 金 道庁旧庁舎 大会議室 53名	講演①:「帰国者支援の継続と発展に向けたボランティアとしての取り組み」 ・講師:難波三良氏(日中友好経済交流協会副理事長) 基調講演:「教室と外をつなげようー共生社会の視点からー」 講師:浅倉美波氏(日本ヒューマンアカデミー) ①「帰国者1世のための日本語学習支援」グループ ・議題:「地域社会での交流活動の促進」 ②「帰国者2・3世(青年・壮年期の方)のための日本語学習支援」グループ ・議題:「働き盛りの方への日本語学習支援の課題と取り組み」 ③「生活相談」グループ ・議題:「帰国者子弟(児童生徒)の進学進路問題をめぐって」
2.高知 02/12/05 木 国際ホテル 高知 47名	講演①:「帰国者の就労問題解決に向けた課題-求人情報のネットワーク化-」 ・講師:中村哲(四国環境管理センター代表取締役社長) 講演②:「人材として帰国者をどう生かすかー体験的コミュニケーション観も含めてー」 ・講師:高橋順一(高橋建材興業代表取締役) 講演③:「中国帰国者に対する日本語学習支援の現状と課題」 ・講師:池純子(高知大学講師) 講演④:「介護保険の利用法」 ・講師:宮崎あやめ(泉野介護支援センター)

	①生活相談グループ ・議題:「帰国者の就労支援に向けた課題と就労後のサポート体制について」 ②日本語支援グループ ・議題:「日本語学習をめぐる問題とこれから の支援について考える」 ③交流グループ ・議題:「共生社会づくりに向けて帰国者集住地区での交流の可能性を探る」
3.山口 03/01/26 日 婦人教育文 化会館 87名	基調講演:「帰国者1世と家族たちは今-帰国後の生活実態など-」 ・講師:本田機先(中国帰国者支援・交流センター所長) ①生活相談グループ1 ・議題:「残留婦人や孤児世代に対する支援上の課題」 ②生活相談グループ2 ・議題:「子どもや孫の世代に対する支援上の課題」
4.愛知 03/07/06 日 桜華会館 53名	基調講演:「異文化環境に暮らす高齢帰国者をどう理解し、支援するか。ーコミュニティ心理学、異文化間心理学の立場からー」 ・講師:原裕視(目白大学) ①交流支援グループ ・議題:「言葉の壁を抱えたまま高齢化し、地域で孤立する中国帰国者との交流」 ②介護支援グループ ・議題:「高齢帰国者とその家族の介護をめぐる問題」
5.山形 03/09/02 火 ウェルハート ピア山形くろ さわ 61名	基調講演:「中国帰国者に対する日本語学習支援の展望」 ・講師:小林悦夫(中国帰国者定着促進センター教務課長) 報告:「山形県における中国帰国者の就労状況及び雇用特別助成金制度等」 ・講師:山形労働局職業安定課職 ①グループ ・議題:「中国帰国者2世3世に対する支援をめぐって」 ②グループ ・議題:「子どもや保護者に対する支援をめぐって」 ③グループ ・議題:「雇用者として今とこれからを語り合う」

<p>6. 福島 04/02/02 日 郡山市労働 福祉会館 49名</p>	<p>報告:「中国帰国者の援護施策等について」 ・講師:吉田和郎(厚生労働省社会・援護局援護企画課中国孤児等対策室班長) 基調講演:「中国帰国者のための介護支援の必要性と課題ー福岡の介護支援の経験から明らかになったことー」 ・講師:名和田澄子(中国帰国者介護支援センター社会福祉士、第一福祉大学講師)</p> <hr/> <p>①介護支援グループ ・議題:「介護支援をめぐる地域の課題」 ②交流支援グループ ・議題:「交流をめぐる支援者間の連携強化へ」</p>
<p>7. 福井 04/09/25 土 福井県職員 会館 32名</p>	<p>報告:「中国帰国者の援護施策等について(仮題)」 ・講師:佐藤陽子(厚生労働省社会・援護局援護企画課中国孤児等対策室) 事例紹介:「福島県郡山市『来往会』帰国者支援の軌跡ー中国帰国者が主人公の交流活動をめざしてー」 ・講師:川崎香(「来往会」事務局長)</p> <hr/> <p>※分科会は実施せず、帰国者と支援者の交流会としてビデオ鑑賞</p>
<p>8. 秋田 04/11/13 金 遊学舎 81名</p>	<p>基調講演:「これからの中国帰国者支援を考えるー日本語学習支援と交流の視点からー」 ・講師:小林悦夫(中国帰国者定着促進センター教務課長) 帰国者体験発表:2名(帰国者1世と2世)「私の歩んで来た道」</p> <hr/> <p>①第1グループのaとb ・「青年期壮年期の帰国者2・3世に対する支援をめぐる」 ②第2グループ ・「帰国者1世に対する支援をめぐる」 ③帰国者部会</p>
<p>9. 長野 05/01/28 金 松本東急イン 40名</p>	<p>基調講演:「これからの中国帰国者支援を考えるー日本語学習支援と交流の視点からー」 ・講師:小林悦夫(中国帰国者定着促進センター教務課長)</p>

	<p>①第1グループ ・「青年期壮年期の帰国者2・3世に対する支援をめぐる」 ②第2グループ ・「帰国者1世に対する支援をめぐる」</p>
<p>10. 青森 05/03/15 火 青森国際ホ テル 51名</p>	<p>基調講演:「これからの中国帰国者支援を考えるー日本語学習支援と交流の視点からー」 ・講師:小林悦夫(中国帰国者定着促進センター教務課長) 事例報告:「帰国者が主体の日本語教室をめざしてー福島県『来往会』の高齢者日本語教室ー」 ・講師:山本京子(地域日本語教育研究会代表)</p> <hr/> <p>①第1グループ ・「青年期壮年期の帰国者2・3世に対する支援をめぐる」 ②第2グループ ・「帰国者1世に対する支援をめぐる」</p>
<p>11. 群馬 05/11/19 土 前橋東急イ ン 51名</p>	<p>基調講演:「多文化理解の視点から地域交流を考えるー中国帰国者との出会い、つながりー」 ・講師:太田敬雄(国際比較文化研究所所長) センターからの報告: 帰国者体験発表:2名</p> <hr/> <p>グループ別懇談会</p>
<p>12. 岩手 05/11/23 日 国際交流プ ラザ 26名</p>	<p>基調講演:「地域でとりくむ中国帰国者の介護支援と介護予防ー異文化の背景をもつ人たちが直面する問題を踏まえてー」 ・講師:名和田澄子(第一福祉大学講師、福岡県中国帰国者介護支援センター代表) 中国帰国者支援・交流センターからの事業報告:</p> <hr/> <p>グループ別懇談会</p>
<p>13. 茨城 06/02/19 日 ホテルマロウ ド筑波 36名</p>	<p>基調講演:「多文化を受容するところー中国帰国者との交流を考えるー」 ・講師:太田敬雄(日本比較文化学会会長) 厚生労働省中国孤児等対策室からの報告 帰国者体験発表:3名</p> <hr/> <p>グループ別懇談会</p>



<p>14. 宮城 07/01/21 日 財団法人みやぎ婦人会館 96名</p>	<p>基調講演:「多文化を受容するところ-中国帰国者との交流を考える-」 ・講師:太田敬雄(国際比較文化研究所所長/日本比較文化学会会長) 中国帰国者支援・交流センターからの事業報告</p> <hr/> <p>①ABグループ ・「地域交流や学習支援」 ②CDグループ ・「高齢帰国者の孤立化防止や生活支援」</p>
<p>15. 千葉 07/02/13 火 プラザ菜の花 79名</p>	<p>基調講演:「多文化を受容するところ-中国帰国者との交流を考える-」 ・講師:太田敬雄(国際比較文化研究所所長/日本比較文化学会会長) 中国帰国者支援・交流センターからの事業報告 帰国者体験発表:3名</p> <hr/>